

脳出血で倒れて
「新しい自分」と出会う

失つて、 得る。

大島渚



著者紹介

大島 渚（おおしま なぎさ）

映画監督。1932年京都市出身。京都大学法学部卒業後、松竹大船撮影所入社。59年『愛と希望の街』で監督デビュー。『青春残酷物語』『太陽の墓場』等を発表し、日本ヌーベルバーグの旗手とうたわれるが、安保闘争を扱った『日本の夜と霧』の上映中止に抗議し、61年に独立。

その後、76年『愛のコリーダ』、83年『戦場のメリークリスマス』等で世界的評価を得る。78年『愛の亡霊』でカンヌ国際映画祭最優秀監督賞受賞のほか、受賞作品多数。著書に、『理屈はいい こういう人間が愚かなんだ』（小社刊）『ぼくの流儀』（淡交社刊）等、多数ある。テレビでの論客ぶりも有名。

本書は、96年に脳出血で倒れ、右半身失調の障害を残しながらも、99年『御法度』で見事復活を果たした著者が、初めて闘病後の自分自身を見つめ直し、病気を乗り越えて得た新しい生き方を問うた一冊である。

うしな^え
失って、得る。

2000年9月20日 第1刷発行

著 者 おおしま なぎさ
大 島 渚

発 行 者 小 澤 源 太 郎

発 行 所 株式 会社 青春出版社

東京都新宿区若松町12番1号 ☎162-0056

振替番号 00190-7-98602

電話 編集部 03(3203)5123
営業部 03(3207)1916

印 刷 堀内印刷 製 本 大口製本

万一、落丁、乱丁がありました節は、お取りかえします。

ISBN4-413-03220-9 C0095

© Nagisa Oshima 2000 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写（コピー）することは
著作権法上認められている場合を除き、禁じられています。

脳出血で倒れて
「新しい自分」と出会う

失つて、 得る。



大島 渚

はじめに

何度やっても慣れない、苦手なリハビリがある。

右手で紙コップをつかみとる。一つひとつ並べ終わると、その上にカードを乗せていく。コップとカードを交互に重ねていって、三段重ねを四組つくり、さらにひとつずつ解体する。そのくり返しである。

二段目のカードを置こうとする。思うように手が動かない。ガラガラガラッと崩れる。またはじめからやり直した。

こんな簡単なこともできなくなっただ……。

あれから四年……。本当にあつと言う間だった。

脳出血で倒れたのは、『御法度』^{ごほうと}の製作発表をした直後のことだった。

脚本を書き上げ、いよいよこれからキャスティング……という段階になって、いきなり生死の境をさまよった。

リハビリの内容は、四年前とほとんど変わらない。リハビリの結果、完全に自由だった時代に戻るかと思っているわけではない。四年前とは同じにならないだろう。治るかどうかというより、これ以上悪くしないことが、今の僕には大事なことだ。

人それぞれいろんな「災難」に遭い、いろいろなものを失っていく。しかし、それを嘆いたり、こぼしたりしても現状は変わらない。

今、僕はただ「今の自分」を受け入れている。それでいいのだと、思うように動かなくなった右手を思うにまかせて六十八年の人生を振り返る。

これ以上、何の幸せがあろうか。

『御法度』は、病気が全快しない状態で撮影した。「もう少し待ったらどうだ」という声

もあつた。でも、今やれることをやらなかったら、一生やれないということなんだと思つた。もちろん不安はあつたが、不安があるからこそやる氣になつた。『御法度』は、この時、自分の人生の中で一九九九年という年にしか撮れない映画だつた。五十歳にしか撮れない映画があり、六十歳にしか撮れない映画があるように。

脳出血で倒れ、自分を見つめるいい契機になつた。右半身の麻痺を残し、病氣の体を抱えた人間としての僕の発言が、この本を読んでくださったみなさんに少しでも役に立てれば嬉しい。

大島 渚

はじめに 3

第一章 病を得て「新しい自分」と出会う 13

「いつ治るのか」という愚問 14

不自由な自分を受け入れる 20

「できないこと」を知って、「できること」が見えてくる 24

言葉がうまくしやべれないぶん、ズバリ結論が言える 27

今日の気持ちは今日伝える 31

待てばもっとうまくやれる、でも「今」やる 35

第二章

そして最後に「自分らしさ」が残る

51

「殺氣」の時代が遅れてついてくる 38

病院に有名人はいない 43

人間、量^{リキヤウ}は変わっても質^{シツ}は変わらない 47

六分の俠氣、二分のスカタン 52

教祖型^{キョウソグタウ}であるということ 56

人類全部をキャスティングしたい 62

真っ白な玉を転がしていく 67

ギリシヤの神々のように 71

第三章

今までの「価値観」を捨てる愉しみ

77

映画監督にも「定年」はある

78

自ら燃えなければどこにも光はない

84

借り物の価値観のいかにつまらないことか

88

価値は自分の中にこそある

92

自分の内を見つめる作業

99

大きなマイナス点が、大きなプラス点に変わる

104

給料なんて、「嫌料」だと思えばいい

110

第四章

こころを支える〃絆〃とは

115

仕事はスーベルバーグ、家庭は松竹ドラマ

116

親子・夫婦間にも礼儀あり

123

「みつともないところを見せたくない」人になれ

129

第五章

「品格」という財産のつくりかた

133

「顔」に自信をもつ

134

努力を表に出してはいけない

137

「着こなす」なんて服に失礼

141

自分の身なりに責任をもて 144

ほんとうの敬称 148

第六章 「死」と向き合うことで「生」を知る 153

革命家として死ねなかった生き方 154

ロンドンよりパリに死す 156

メント・モリ 159

不自由な体ゆえの心の自由 162

余は如何にして脳出血に倒れしか 166

第七章 この一瞬を大切に生きる

171

キレない法

172

恋するように夢中な何かをもっているか

177

“自分探し”ではなく“自分変革”

181

挨拶ができて朗らかであればいい

184

新しいだけで期待される

189

未来を信じ、未来に生きよ

192

装画
横山
明

第一章 病を得て「新しい自分」と出会う

「いつ治るのか」という愚問

僕のような病人が発する中で、一番愚かな質問は、

「いつになったら治りますか」

「どのくらいで元に戻りますか」

というもののだ。

これは自分で考えなくてはしょうがない。どれくらいで治るか、どうしたら治るか、全部自分で考えて、やっていかなくはならない。一生懸命やってみたところで、治らないかもしれない。

だいたい、どの段階をもって「治った」とするか、はなはだ疑わしい。それに、いついつまでに治らなきゃいけないなんて思うことが、ストレスになってしまう。

脳出血を起こしたあとの、半覚醒状態のような頭と体の働き。そのもどかしさは、体験してみないとわからないものである。

四年たった現在でも、リハビリは変わらず続けている。

身体療法という体を動かす訓練、言語療法という言葉の訓練、それと作業療法。これが遅々^{ちぢ}として思うように進まない。

毎日毎日続けても、よくなっているのかどうか実感できない。これもまた、やったことのない人にはわからないだろう。一日のメニューが終わると、口をきくのも嫌になるぐらいにくだびれたこともある。

それでも僕は続けた。リハビリの先生に言わせると、「愚痴^{ぐち}も弱音も一切吐かない、優等生の患者さん」らしい。

他の仕事がないときは、週に三日病院に通い、一時間から二時間。そのほかに、家でリハビリ体操を一日に二時間くらい。結局のところ、リハビリが生活の大きなパートを占め